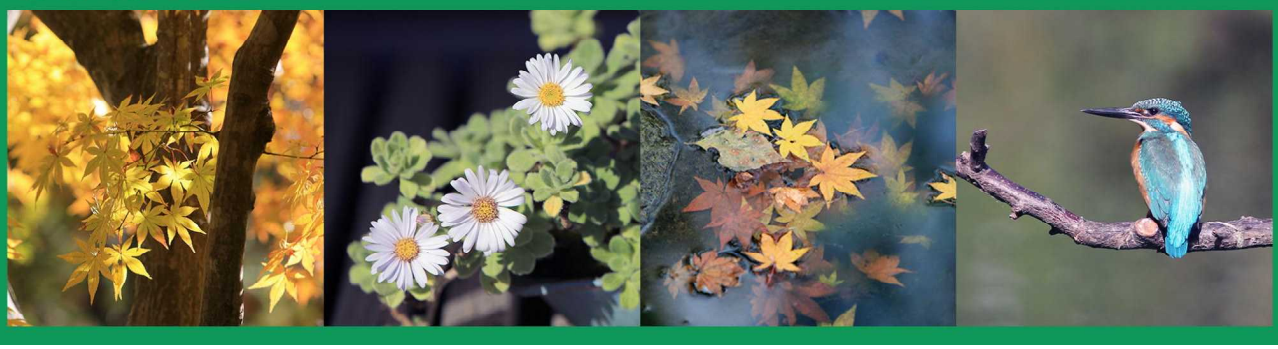
http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.291　13/11/21



サ～タッ！パッ！トン！

　モデルも兼業するシャラポアというロシアの美人テニスプレーヤーがいる。ランキングもＴＯＰ10に入る実力者であるが、その試合を見てみると、ショットごとにすごい雄叫びを上げている。擬態語で表現しようと思っても、どんな表記にしてイイのか分からないような声（叫び？）である。（よく、テレビのテロップに「×☆※△？～」みたいなのが出ることがあるが、あんな感じ？）　砲丸投げの室伏選手も、力を込めた一投の時には、これまたどう表記していいのか分からないような雄叫びを上げている。何か、力が入る時はああなるものなのだろうか？　（だから「一人で起きる」際に、「ぐわぁ～ぁぁぁ！」とか叫んでみよう！などと提案しているわけではないので、朝、変な振る舞いをして家の人を驚かさないように…笑）

＊

　今、「力が入る時」と書いたが、実は声をあげると、余計な力が抜けるということがあるのかも知れない。こういうことは、体育学みたいな分野で研究するのだろうか。

　先日、夕食を食べる際に何気なくテレビをつけたら（←悪いクセだと主人から言われているが…）、オノマトペ（擬声語＋擬態語）と運動の関係みたいな番組をやっていた。真剣に見たわけではないのだが、日本語には「キンキンに冷えた」とか「風がピューピュー吹く」とかのオノマトペがどれくらいあると思う？　その番組によると約5000種類くらいあるのだそうだ。う～ん、多いのだろうか？少ないのだろうか？

　で、朝日大学の何とかいう先生（さかなクンみたいな雰囲気の若い先生だった…）が、そのオノマトペと運動の関係を研究していらして、「「ニャ～と言いながら体を曲げると、いつも以上に曲がりますよ」というのである。根拠は、「ニャ」は「フニャフニャ」とか「クニャクニャ」とか、柔らかなものの形容に使われるオノマトペに共通するからだという。？？？？？みたいな雰囲気であろう。

　で、小学生10名が実験台になり、「ニャ～」と発声してトライした場合と、黙ったままトライした場合とでの前向屈の数値を比較してみるという実験をやっていた。すると、「ニャ～」の方で記録が伸びた生徒が10名中９名出たというのである。う～む。

　私はここで見るのを止めたのだが、主人の方は見続けて、次の実験では、まったく跳び箱が跳べなかった小学生10名に、「サ～、タッ！　パッ！　トン！」（助走で「サ～」、踏み切りが「タッ！」、手をつく際に「パッ！」、着地が「トン！」）と発声させたところ、何と10名全員が跳び箱を跳べるようになったというのである。主人はすっかり感動しており、孫の為にメモを取っていた…。う～む。

＊

　なんかウソくさい話ではあるのだが、理論的な説明によると（…って私は見ていないので、完全文系人間の主人の記憶をもとにした話だが…）、擬態語を発声することで、小脳（理性の大脳に対して、人間の本能を司る部位）が活性化し、それによって人間が本来もっている運動能力が発揮できるようになるのだいう。ふむ。そう言われると、何か正しいような気もするなぁ。さて、どうでしょう？